

北海道哲学会・北大哲学会共催シンポジウム《ラッセル：現代哲学への転回点としての》

ラッセルはヘーゲル主義者だったか

Was Russell an Hegelian?

山田 健二

1 はじめに

マクマスター大学所蔵の資料、いわゆる「ラッセル・アーカイブ」が、80年代より全集として刊行されはじめたこと、とりわけ90年代に、最初期の覚書や未完のまた未発表の論文がまとめて刊行されたこと([CP 2]; [CP 3]; [CP 4])によって、そしてまた、ヒルトンやグリフィンによる先駆的業績([Hylton]; [Griffin])の導きによって、初期ラッセル像はおそらく一新された。その一つが例えば記述理論の成立史の再構築であることはまちがいない¹。もう一点の成果（の少なくともその方向性）を今回論じたい。それは、観念論から実在論への「転向」の内実が、そう思われていたほどには劇的なものでも決定的なものでもなかったという認識が可能になったことである。ラッセル自身が後の回想で、たびたび自身の「転向」に言及し、あたかもその前後で決定的な断絶があったかのように語っているが、実のところこの断然は、もしあってもゆるやかなものであり、解釈次第では、むしろ連続しているとみなすことも可能なものである。そもそもラッセルは、「ヘーゲル主義」を標榜しながらヘー

¹ 記述理論をはじめて論じた1905年の画期的論文「表示について」(“On Denoting”)は、「分析哲学の出発点」と評価されるとおりに明晰かつ簡潔なものだが、一箇所だけ、「グレイの悲歌の一行目」という句の難点を論じた難解な部分を含んでおり、古くから解釈者たちを悩ませてきた。だがこの論文に膨大な草稿類が先行していたことがアーカイブ研究および全集刊行により明らかになり、いまや「グレイの悲歌」問題は比較的見通しよく理解されるようになった。

ゲル自身の著作を丹念に検討したわけではない。ヘーゲルの影響は、当時のケンブリッジの教師や友人からの間接的なものであったし、それら間接的な影響も、その内実には検討の余地がある。第一に、ラッセルは観念論者であったといえるのか、第二に、ラッセルは一元論者であったといえるのか。

2 ラッセルは観念論者だったか

第一の点について、ブラッドリの観念論、すなわち、現象と実在を区別し、現象のうちに矛盾を見出してその実在性を否定するという論法（さらに、真の実在性を「絶対者」の観念に表示されるものの中に見いだそうという論法）を、ラッセルは当初から好まなかったという事実がある。むしろ経験されるもの（現象）は、そのとおりに実在しているはずだというのが、当初からのラッセルの考え方であった。例えば、ヘーゲル主義にどっぷりつかっていたはずの1897年に、ラッセルは「使徒会」で、「そう見えるですって、事実そのとおりののです」[Madam]²という論文を読み上げている。そこでは、観念論の無時間的・全体論的楽観論に対し、人間の経験の時間性・有限性を強調し、人間経験の範囲内ではいわゆる「現象と実在」の区別が不可能であること、人間経験においては、「現象世界」に生じる有象無象、彼の目に幸福または不幸と見えるもろもろの出来事が、彼の生に重大な意義を有していることを論じている。現象世界で、ある人間に降りかかる悪は、人間の有限性の範囲内ではいつまでも悪としてとどまり、たとえ完成された実在世界でその悪が消失するのであるとしても、そのことは彼の慰めにはならないとラッセルは主張する（[Madam], p. 82–83）。また、この論文に関して、ラッセルはムーアに次のように書き送ってもいる。「知的ではないすべての目的のためには、現象の世界は実在の世界であるといえる」（[Madam] に対する編者注, p. 79）。

以上はラッセルが個人的幸福や不幸に、当初から強い関心を抱いていたこと、つまりすぐれて実践的な問題意識を持っていたことを示すものである。他方、

² “Seems Madam? Nay, It Is” というタイトルはハムレットの台詞に基づくとのことである。

「知的世界」においても同様に、現象世界に対するこの関心を、相当程度当初よりすでに持ち合わせていたと論じる余地がある。というのも、後で見ると、ラッセルはいわゆる「観念論」の時代から、経験に与えられたデータを数学的・論理的な道具立てにおいて整理し、時間や空間や物体といったものを再構成するという、明らかに後の時代と連続する哲学的方法論を採用していたといえるからである³。

このことは、いわゆる新ヘーゲル主義者とラッセルの関心領域の違いに起因するのかもしれない。自伝によれば、1895年（23歳）、ラッセルは職業的哲学者としての今後の展望として、一方で純粋数学から物理学へと至る科学の哲学、他方で社会問題を解決する哲学を企図し、両者が最終的には合一する地点を目指したとのことである。すなわち、一方で数学的・論理的道具立て使用しつつ、幾何学、力学、心理学（知識論）、形而上学へと進み、他方で人間の諸欲望を解明し、調整する社会改造の理論を構想した⁴。そして最終的に目指されたものは、「科学的なもの実践的なものの統合 (synthesis)」であった ([ABR], p.127)。ブラッドリやマクタガートが、現象の非実在および矛盾のない真実在としての絶対者の論証を目指したのに対し、ラッセルは当初から、具体的な人間の知識また社会を解明することを目指していたのである。

3 ラッセルは一元論者だったか

第二の点について、一元論がどのような理論的背景を持つのか、その帰結は何かについて、ラッセルが詳細に検討しはじめるのは、実は『数学の原理』（1903年）以降、つまり実在論への「転向」がなされて以降、真理論が彼の哲

³ ただし、ラッセルの哲学的自伝には次のような記述がある。「(当初のラッセルは) 徹底したヘーゲル主義者であって、科学の完全な弁証法の構築を目指し、そのあかつきにはすべての実在が実は観念的 (mental) なものであることが証明されるはずだった」 ([MPD], p.32).

⁴ 個人の欲望の重要性を認めたいうえで、自身の欲望を「社会的に望ましい欲望」に同化させる処方箋を提供することで、社会改造を目指すというのが、この方向での基本的論点であった。

学の主題に挙がってきた以降のことであった⁵。一元論によれば部分的真理はありえず、全体的真理が主張され得るのみであると、『原理』以降ラッセルはさまざまな機会に一元論を批判した。例えば「叔父である」という性質は、兄弟姉妹を持ち、そのうちの一人が子を持っているということを含む。当然父母を持たなければ叔父であることもできない。したがって「叔父である」という性質が誰かに妥当するためには、この世に彼の父と母、彼の誰か兄弟姉妹、その人物の子どもが存在することが必要である。一人で叔父になることはできない。誰かが叔父であることが真実であれば、宇宙はそれに応じて「拡大」される。他の性質についても同様のことが言え、かくして宇宙の部分的真実は、全体的真実に照らしあわされてのみ主張可能になる。これがラッセルの論じる「一元論の真理論」である⁶。この真理論に対する批判として、『原理』以降のラッセルは、よく知られた「外的関係論」に基づいて応答する⁷だけでなく、知識経験における「分析」の重要性に基づいて応答もした。一元論を取るかどうかの選択は、「分析を味方につけるか、敵とみなすか」という重大な哲学的選択なのであると([HWP], p.714)。

中期以降のラッセルは一元論の論理的帰結として、次のような事実を認めなければならないと指摘する。一元論を貫けば、誰かについて何かを知るために

⁵ 真理論が主題として論じられるのは、*Philosophical Essays* (1910) に収録された諸論文、すなわち、“The monistic theory of truth” (1907), “On the nature of truth” (1907), “Transatlantic ‘truth’” (1908) においてである。これらの原型となる論文は、1905年ごろより公表されている。

⁶ *History of Western Philosophy* (1945) のヘーゲルの章に基づく。もちろんこれは、真剣な批判と言うより、パロディに基づく批判と言うべきものであり、ヘーゲル哲学に対する微塵の共感も覚えさせないものである。後に自分自身でこれほど侮蔑することになる立場を、無反省に初期のラッセル自身が取っていたということは考えにくいのではなからうか。

⁷ 知らない間に叔父になることも可能であるし、誰かが叔父になることで彼がその本質を変化させるというわけではない、という常識的な見解は、関係の実在性を認めることではじめて可能になるとラッセルは論じる。関係は関係項によって定義されなければならないわけではなく、端的に、関係項をある関係のもとに置く。要するにこれが、「関係の実在論」もしくは「外的関係論」である。

は、彼の人間関係すべてを知らなければならない、のみならず、彼の特質のすべてと、それに関連するすべての特質を知らねばならない、要するに、誰かひとりを知るために、宇宙全体を知る必要がある、と。部分に関する真理はなく、全体の真理があるのみだ、というわけである。「そうすると、いったい知識というものはどのようにして始まりうるのか」(*Ibid.*)とラッセルが言うとおりに、これは知識経験を不可能にしてしまいかねない主張である。というのも、知識経験とは対象を分別し、分析する過程が意味を持ってはじめて成立するはずのものだからである⁸。「抽象的に述べるなら、我々はさまざまな種類の性質を区別できなければならない。事物は他のいかなる事物を含意することなく、ある性質を持ちうるはずである」([HWP], p. 715)。「他から区別されて現れるもの」が中期以降のラッセルの探求の端緒となることは言うまでもない。というのも、中期以降の彼の方法論は、一貫して、感覚に与えられたデータもしくは外観から、(例えば)事物を論理的に構成するというものだったからである。だがそれだけでなく、この方法論を、ラッセルは実は最初期から一貫して取り続けていたのではないか。例えば、最初期の覚書に、次のような注目すべき記述が見られる。「空間と時間をはじめから考慮に入れることで、純粹論理にではなく、現象にこそ密接に関連した弁証法、つまりカテゴリーの図式にすぎないものではない弁証法を得ることが可能であるかもしれない。というのも、そこにおいて、カテゴリーと感覚の化学的結合とも呼ぶべきものが生じ、そのことが、純粹なカテゴリーの図式化のみでは得られない新たな観念を導きだすかもしれないからである」⁹。経験に先立つ「論理」のみよる、純粹に演繹的な方

⁸ このことは、例えば晩年の *Human Knowledge* (1948) でも主題的に論じられてもいる。その概要を示せば以下のようなになる。不分明な「これ (this)」は後の分析を待つさまざまな属性を含んでいる。だが分析が完了した後、それら属性の総和として「これ」が再定義されるというわけではない。むしろ、知覚判断の端緒してのみ指定される(その限りでいかなる属性もまだ持たない)「これ」は、知覚判断の形式を暗示するものとして必要不可欠なものである(同書第二部)。この種の議論は、実は初期の *Philosophy of Leibniz* (1900) にもみられる([PL], pp. 59–60)。

⁹ “On the idea of dialectic of the science” と題された1898年の覚書。[CP 2], p. 24.

法を、ラッセルは当初より拒否していたのである。

ともあれ、ラッセルは後で自分自身が批判することになる一元論の破壊的帰結に自覚なしに、「一元論者」であり続けた。あるいはむしろ、「偽装された一元論者」というのがより適切であるかもしれない¹⁰。のちの一元論批判でラッセルは、一元論によれば、個体としてはいうまでもなく、属性としても、区別される「部分」というものは存在せず、一様な全体しか結果として残らないと論じた¹¹が、後で述べるように、初期ラッセルの科学の哲学の企図は、空間を自由に移動できる幾何学点や、空間を自由に運動できる力学的点を定義する試みであった。自由な移動また運動を通じて同一性を保つ「点」をいかにして定義していくか、あるいは、他と区別されるがまだ何ものでない「点」に、いかにしてその（絶対的）内実を与えていくか、それが彼の課題だったのであり、さらにその出発点として、全体のうちの、他と区別されて感覚に与えられる部分を彼は必要としたのである。

この課題を遂行するのに、ラッセルは「弁証法」を自称する方法論を採用した。そして、初期ラッセルが「ヘーゲル主義」であったと言っているのは、このこと、つまり（自称）「弁証法」を採用したという一点に尽きるのではないか。ラッセルは文字通りの観念論者でも一元論者でもなかった。初期ラッセルをより適切に特徴付けるのであれば、彼はむしろ「相対論者」と呼ばれるべきであり、その意味は、彼が現状の科学（もしくは人間社会の体制）を再構成するにあたって、例えば空間における絶対座標や力学における絶対的個性を持つ物体など、「絶対的なもの」をあらかじめ措定することを避け、あくまでも経験に与えられるひとまず個別的なものだけを認め、そこから「絶対的内実」を論理的に構成していくという方途を探求したということである。

¹⁰ グリフィンは、初期ラッセルのテキストを詳細に検討した著書で、ラッセルは当初より、一元論者であったというより、多元論者であったと結論している（[Griffin], p. 327）。

¹¹ 「（…）多性は消失し、全体として構造もしくは複雑性を欠いた実在しか残らなくなる」。[MTT], p. 154.

相対論の利点は、経験に与えられたデータを超えて、理論的に要請されるというだけの対象を呼び込まなくてすむ、ということにある。理論的に要請される対象は、単に要請されるだけでなく、構成されなければならないというのがラッセルの少なくとも中期以降の一貫した立場であった。例えば、そこへと無限に近づいていく極限として無理数を定義する場合のように、ラッセルによれば、対象が理論的要請だけから存在し始めると仮定するのは、「搾取した利益が、正直な労働から得た利益よりまさっているというのと同じである」([IMP], p. 71)。理論的对象は、単にそれが必要であるからというのでは存在論証として不十分であり、「正直な努力」によって、つまり経験に与えられたデータに基づいて（そして数理論理学的手法で整備された上で）再構成されるべきものなのである。この後年の哲学的姿勢は、初期の相対論に予見されているといえるのではないか。

4 量から実体へ：ラッセルの「弁証法」

ここで初期ラッセルの「科学の弁証法」の具体的中身を確認したい。それは、数学、幾何学、運動学、力学、（さらに「心理学」＝知識論、そして形而上学）と進み、すべての科学を包摂するという、すぐれて「百科全書」的試みであり、その限りでは確かにラッセルはヘーゲル主義的哲学者であった。この際もちろん、一つの体系内で見出された矛盾が「上昇」の契機となり、やがて「矛盾のない形而上学的体系」へと至るという見込みのもと、ラッセルは研究を開始した¹²。

先に述べたように、経験に先立つ「論理」のみによる、純粹に演繹的な方法を、ラッセルは当初より拒否していた。直接経験を抽象化しつつ、それぞれの科学において最小限の論理的前提（公理）を導出し、その体系が矛盾にいたる地点で、「弁証法的に上昇し」、つまり、新たな前提を追加して、別の体系に移

¹² 最初期のこの弁証法的企図に関して、晩年ラッセルは「完全に無意味」な試みであったと自己批判しつつ、「歴史的関心を引くかも知れず、またヘーゲルのテキスト以上に方向を誤っているとも思われないので」と断った上、この時期の覚書の断片を、8ページに渡って引用している([MPD], pp. 33-41)。

行する、というのが、ラッセルの「弁証法」の方法論であった。

弁証法の出発点となるのは、直接経験に与えられた、他と区別される限りの「量」であり、それがやがて、矛盾の契機を経て、それぞれの科学が要求する程度の内実を与えられる。まず「量」は幾何学的点へと抽象化される。しかし、幾何学的点とは、自由に空間を移動できなければならない。だが点とは、他の点との相対的關係しか持たない。つまり同一性を保ちながら空間を移動できる点という概念は、矛盾を含む。この矛盾は、ラッセルが相対説の立場を取っているからこそのものであることはいうまでもない。そしてこの矛盾が力学を呼び出す。幾何学的特性を与えられた点に、「力」（たとえば重力）という内実（あるいは「個性」）が与えられ、同一性を保ちながら空間を移動する「点」が確保される。

だが、力学的点も、幾何学的点同様の矛盾をかかえる。力学的点とは、自身運動するものであると同時に他者を運動させるものでもある。力は他者に対するその効果（運動）によって知られる。ところが、それぞれの点の位置関係があくまでも相対的なものであるとすれば、ある運動が自身の運動であるか、他から動かされた運動であるかを区別することができない。つまり運動はあくまでも相対的であり、したがって「力」は、力学的点を確かに区別するほどの決定的質とはいえない。

ここでも困難は「(見かけ上) 同質で、かつ区別される」ということに尽きる。そしてこのことが問題になるのは、やはりあくまでも相対説の立場をとっているからこそである。これらの困難は初期ラッセルがブラッドリの影響下にあったからこそその難点であると一般には理解されている。ブラッドリによれば、関係は関係項がそれぞれ共通の質をもっていることか、それぞれ異なっていることかに帰着される（のちにラッセルはこの立場を「内的関係説」と称した）。すなわち「関係」というものは実際には存在せず、対象とその質が特定されさえすればあらゆる事態を言い表すことができる（つまり、任意の関係命題は、主語述語命題によって言い換えることができる）。この立場からすれば、「同質であり、かつ区別される」とは明らかな矛盾であることは間違いない（[Grif-

fin], p.320)。この立場を放棄すれば、すなわち関係を関係項の質に依存させることなく、それ独立で理解する立場を取れば（つまり関係の「実在性」を認める立場を取れば）、「同質であり、かつ区別される」ことは矛盾ではなくなるように見える。それぞれの同質の点は、あらかじめ措定可能なそれぞれに異なる関係によって、他の点と関係付けられている、というように。ここでは関係項と関係との循環という事態はもちろんおこらない。

実際ラッセルは1899年、ブラッドリの関係説を自覚的に批判し、それに対立する教説として、「関係の実在論」を提唱した([CR])。さらにそれを時空論に応用し、1900年ごろ、時間および空間の絶対説を試みた([PTAR]; [NO]; [PTASR])。すなわち絶対位置を認めること、つまり、いかなる主体からも、いかなる観点からも、永遠に同一である位置を認めることで「同質の相違」問題を回避しようとした。「点」はそれぞれ、特定の（そして組織的に与えられる）位置関係に関連付けられることで、同質でありながら他と区別され得る。一般に、そしてラッセル自身の回想においても、関係の実在論を確立して、ラッセルはヘーゲル主義の「呪縛」からついに解放されたと理解されている。

だが「同質の相違」の矛盾は、関係に関する立場がどうであれ、ラッセルにおいては別の重要な論点を含んでいる。というのも、ラッセルにおいては、理論的对象が、経験に与えられるものからいかにして構成されるかが、当初から重要な哲学的問題であったからである。時空の絶対説は、仮定的な「絶対的點」をあらかじめ措定するものである。他方、初期ラッセルの立場は、関係項のみを仮定し、それぞれが組織だって配置される仕方を「幾何学の公理」として追求するものであった。

例えばある初期草稿で、ラッセルは次のように論じる。虹は色の規則正しい配置により構成されている。色の法則が、虹の幾何学を構成する([MP], p.89)。これと同様のものを、ラッセルは空間を構成する（見かけ上）同質の点に見出そうとするのである。同質の点に、固有の質を見出し、しかもその質の法則により、点の配置が決定されるような、そのような質を見出すこと、これこそがラッセルの弁証法なのである。「運動の科学は、質 A を特定し、その

配置の法則を特定し、その変化の法則を特定したとき、完結する」(Ibid.)。

理論に都合よくあらかじめ配置された「絶対的点」という存在者を想定するやり方は、「転向」以降「過剰な実在論」を取ったとされるラッセルにおいても、論点先取的にすぎたであろう。事実『プリンキピア』等のより洗練された数学的道具立てを用いて、中期以降、ラッセルは再び時空の相對説へと戻っていく。そしてそれは、「転向」前後の断絶を感じさせないものであり、むしろ初期の相對説の延長線上にあるものだと思われるのである。

*

さて、力学を超えてラッセルが次に向かうのは、心理学、そしてさらに形而上学である。とはいえこれらは展望として言及されるのみで、アイデアの素描すら資料として残っていない。心理学についてはわずかに、「力学的点における力」と類比的なものとして「動能(?) (conation)」というものが言葉として言及されているのみである。「絶対的位置の源泉としての「ここ」の優位性が回復される見込みがある。おそらく力を動能へと置き換え、心理学へと移行することによって」([DAM], p. 16)。認識者にとって「ここ」が絶対位置の規準となる。この事実を空間論に組み込もうというのである。

だが「動能」がどのようなものであるか、論じた資料はない。あるいは(点としての!)「魂」のようなものが想定されていたのかもしれない。この点に関して興味深い未発表論文がある。「時間は必然的に充満体(plenum)とみなされるのに、どうして空間はそうみなされないか」([Plenum])という奇妙なタイトルの論文である。時間は主観的に、空間は客観的に捉えられることが多いが、時間と空間は同様に扱われなければならないことを論じたものだが、その中で特に、我々の経験が時間の中でなされるのと同様、経験は空間の中でもなされるといい得、その点で時間と空間に本質的相違はないとラッセルは論じる。「充満体」、すなわち空隙がなく、任意に分割可能な部分をもつものとして、時間も空間もとも理解されうると。

「経験が空間の中でなされる」という主張は、彼の空間論の前提となる相對説(すなわち関係項の相對的關係が空間を構成する)を念頭に置くならば、経

験は空間的関係の関係項となる、あるいは経験は空間的関係をもつという主張であると理解される。経験が時間的関係をもつことは一般に認められているが、空間についてはそうとはみなされない、しかしそれは根拠がない、というのがこの論文の主張である。

経験される事象をもちいて、それぞれの前後関係（または同時関係）から時間が構成され得るのであれば、同様に、経験される事象の位置的前後関係（または同地点関係）から空間が構成され得るともいえるのではないかとラッセルは主張するのである。だが経験の位置とは何か。確定的な答えは控えながらも、ラッセルはそれは身体のどこか一部分ではなく、むしろ「魂」であろうと述べる。「私が二つの場所に同時にいることはできないという言明に有用な意味を与えるためには、私の魂は一つの場所にあるということ、さらにそれに加え、魂が確固たる一つの場所にあり、しかも場所を変えることもできると想定されなければならない」（[Plenum], p.93）。部分を含まない「点」としての魂が、可能的に空間を充満する、あるいは、魂の配置が空間を形作る、というわけである。

心理学への移行、すなわち「魂」という内実を点に与えることが、「同質の相違」の問題解決につながる可能性を、この論文は示唆しているといえる。しかし「質に基づく配置の法則」はどうだろうか。「魂」を「視点」と読み替えてみれば、おそらく、視点を動かすことによるずれと重なりの方則が、その候補となるだろう。虹が色の法則による幾何学的配置を取っているように、空間はいわば知覚によって彩られ、知覚の方則によって配置されている。そしていうまでもなく、このアイデアはまさしく、中期の『外部世界』での空間構成論と同様のものである。

5 結論

以上、ラッセルは文字通りのヘーゲル主義者とは言えないと論じてきた。まず、彼は文字通りの観念論者ではなかった。実際彼は、「現象世界」を、そこでこそ個人の問題がたち現れ、また場合によっては解決される場として重要視し

たし、理論的側面においても、彼の哲学的方法論は、後年同様当初から、経験されるデータからの（後の言葉で言えば）「論理的構成」であった。また彼は、文字通りの一元論者でもなかった。というのも彼の関心は、知識経験に立ち現れる現象を分析しつつ解明していくことであったからである。分析が可能であるためには、「部分的真理」が何らかの意味で確保される必要がある。あるいは、「全体」の中に経験的に区別されうる異質な部分というものが含まれていることを認めなければならない。それこそが彼の「弁証法」の出発点となるものであるし、またそのゴールと目されていたものは、ブラッドリの「絶対者」であるというより、段階を追った具体化を通じして、具肉化された「実体」であった。そして初期ラッセル弁証法の暫定的な結論は、知識の要件として要請される最大限に抽象的かつ等質な「点」が、最終的に、思考によって色づけられた「実体」として、空間を（可能的に）充滿するにいたるということである。これは一元論的でも多元論的でもなく、むしろモナド論的とも言うべき立場ではないだろうか。

文献

- [Griffin], Griffin, *Russell's Idealist Apprenticeship*, Oxford Univ. Press, 1991.
- [Hylton], Hylton, *Russell, Idealism and the Emergence of Analytic Philosophy*, Oxford, 1990.
- [CP2] *The Collected Papers of Bertrand Russell vol. 2 (1896–9)*, Nicholas Griffin and Albert C. Lewis (ed.), Routledge, 1993.
- [CP3] *The Collected Papers of Bertrand Russell vol. 3 (1900–2)* Gregory H. Moore (ed.), Routledge, 1993.
- [CP4] *The Collected Papers of Bertrand Russell vol. 4 (1903–5)*, Alasdair Urquhart (ed.), Routledge, 1994.
- [DAM] Russell, “Dynamics and absolute motion”, 1896, in [CP2].
- [Madam] Russell, “Seems Madam? Nay, It Is”, 1897. in *Russell on Ethics*, ed. by Pigden, Routledge, 1999.
- [MP] Russell, “Motion in Plenum”, 1897, in [CP2].
- [Plenum] Russell, “Why do we regard time, but not space, as necessarily a plenum?”, 1897, in [CP2].
- [CR] Russell, “The Classification of Relation”, 1899, in [CP2].

- [PTAR] Russell, "Is Position in Time Absolute or Relative?", 1900, in [CP3].
- [PL] Russell, *A Critical Exposition of the Philosophy of Leibniz*, Cambridge University Press, 1900.
- [NO] Russell, "On the Notion of Order", 1901, in [CP 3].
- [PTSAR] "Is Position in Time and Space Absolute or Relative?", 1901, in [CP 3].
- [MTT] Russell, "The monistic theory of truth", 1907, in *Philosophical Essays*, Longman, 1910.
- [IMP] Russell, *Introduction to Mathematical Philosophy*, Allen & Unwin, 1919.
- [HWP] Russell, *A History of Western Philosophy*, Allen & Unwin, 1945.
- [MPD] Russell, *My Philosophical Development*, Allen & Unwin, 1959.
- [ABR], Russell, *The Autobiography of Bertrand Russell* (3 vols.), Allen & Unwin, 1967–1969.